

「仲間に教える」役割設定を用いた特別支援学校生徒に対するキャリア支援  
－模擬喫茶店舗を活用した就労支援と情報移行の検討－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
小島 遼

本研究は、「仲間に教える」役割設定や、学生ジョブコーチによる支援が創り出す特別支援学校生徒のキャリアに関わる情報と、対象生徒にとってのそれらの情報の価値を検討することを目的とした。

本研究で実施した就労実習の参加者である A と B は、特別支援学校高等部の生徒であった。彼らは、学生ジョブコーチの支援のもとで、大学内に設置した模擬喫茶店舗の店員として、手順書に基づいた接客、会計等の業務を行った。また、A は 6 日間実習に参加し、4 日目からは中途参加した B に仕事を教えた。B は 7 日間実習に参加し、最後の 2 日間喫茶業務について初心者をつけた大学院生である C に仕事を教えた。実習後、学生ジョブコーチが参加者たちの実習中の行動を行動分析学の三項随伴性の枠組みを用いて表現し、特別支援学校の教員に報告した。その報告の結果、参加者に対する支援学校の教員の言語行動がどのように変容したかを分類した。

実習 4 日目に、B に仕事を教えるように教示された A は、自発的に接客業務に関する手順書を見直した。3 日目まで平均 58.5% であった接客業務の自立遂行率は、手順書を見直した直後に 88.2% まで上昇した。また、A と B は教授者として被教授者に仕事を教える際には、教える役割に応じた様々な行動を示した。A と B は、手順書や学生ジョブコーチによる指示をもとにして、被教授者に対して言語指示や指さしを行った。さらに A は、B の正反応に対して、盛大に拍手や賞賛を行い、B の自立遂行率の上昇に応じて次第に指示を出さなくなった。また、B の指示を C が聞き取ることができなかつた際、B は手順書を指さしながら指示を出すという新たなコミュニケーションモードを示すことができた。実習で確認したこれらの情報を支援学校に伝えたところ、支援学校による参加者の評価を変えたもの、参加者の次の支援につながる言語行動を引き出すことができたものがいくつかあった。

本研究の結果から、人に教えることではなく、教授者になった際に自発する手順書を見直すという行動が、教授者にポジティブな効果をもたらすことが示唆された。そして、新たに「仲間に教える」役割設定を用いたことで、参加者のキャリアに関わる情報を創り出すことができた。支援の価値はその個人の関係者の言語行動の中に表れるとされている。本研究で創り出した情報は、関係者の言語行動を部分的に変容させることができた。キャリア支援を行う支援者は、関係者による評価を変え、次の支援につながるような情報を創り出し、伝えていくことが必要である。